

通年の観光プログラムを企画し、 人口減少克服を目指す

弘前大学人文社会科学部 李ゼミナール

代表 能美澤佳弘

澤田 隼

伊藤 和人

小笠原有唯

工藤 蓮香

林 超凡

孫 靖淇

陳 婷婷

1 はじめに

青森県には豊かな自然や豊富な農林水産資源があり、それらを活用した観光客向けのイベントや収穫体験等が県全体で行われている。

しかし、現状ではこれらの素材をコンテンツとして十分に活用できていないことから、観光客が訪れる季節に偏りがある。

そのため1年を通じて観光資源を有効に活用する方法について調査研究することとした。

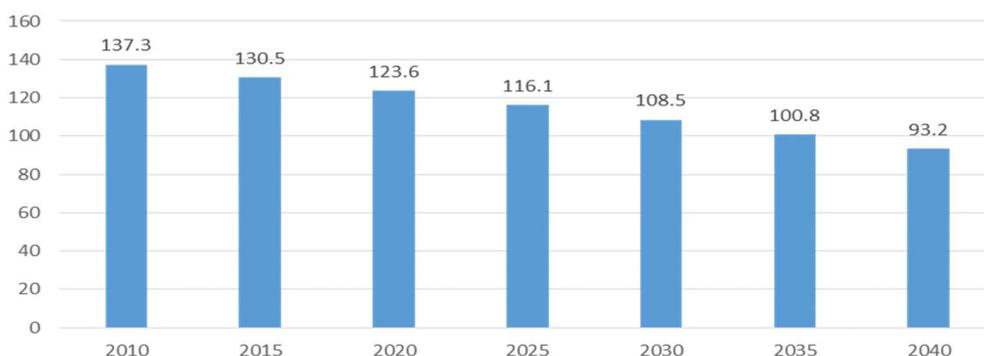
2 通年の観光プログラムを企画し、人口減少克服を目指す

(1) 青森県の現状

① 青森県の人口減少の現状

青森県の人口推移のグラフを見ていく。(図1) このグラフは縦軸が人口数(単位:万人)、横軸が2010年から5年ごとの過去、現状、未来の人口である。グラフを見ると2010年の137万3千人から年々減少し、2040年には100万人以下になると予想されている。

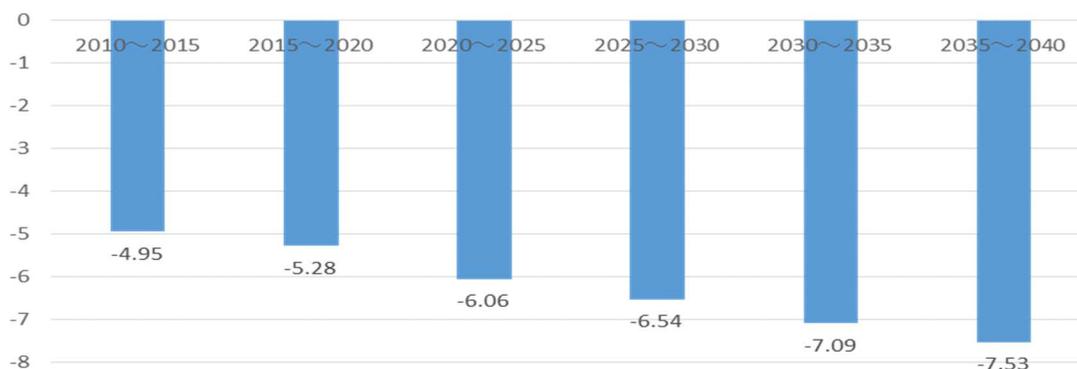
図1 青森県の人口推移



資料: RESAS より作成

そして、人口減少率についても見ていく。グラフは縦軸が人口減少率の割合(単位:%)、横軸が2010年~2015年といった5年間で区切られた年である。2010~2015年の-4.95%から幅も年々大きくなっており、人口減少率が増加傾向にあることがわかる。

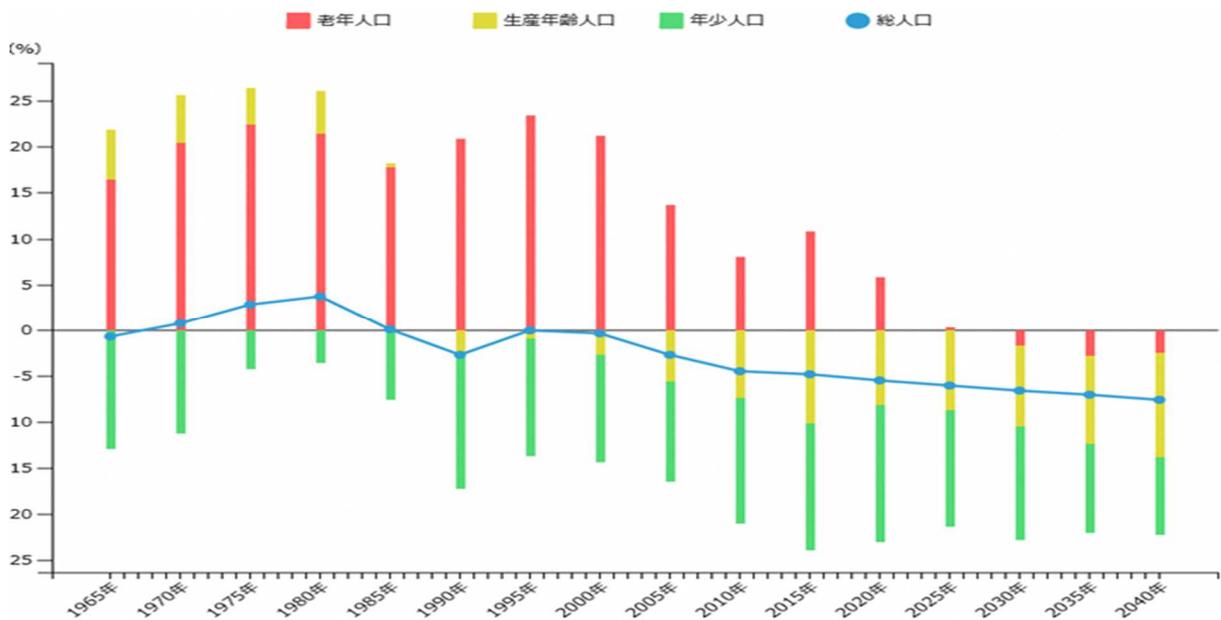
図2 青森県の人口減少率



資料: RESAS より作成

また、青森県の人口構造についても見ていく。下記のグラフは、総人口の老年人口、生産年齢人口、年少人口の割合を示している。縦軸が増減率であり、横軸が年度である。年少人口は1965年以降、増減率がマイナスである。さらに生産年齢人口も1990年以降減少している。また年少人口と生産年齢人口の減少に加え、これまで減少していなかった老年人口も2030年以降減少すると予想されている。老年人口が減少することで、青森県は人口減少ステージⅢの段階に突入してしまい、県としての存続が難しくなってしまう。人口減少ステージの考え方については増田寛也氏が2014年に発表した「地方消滅」を参考にした。ステージⅠは人口増加＋年少人口減少、ステージⅡは老年人口微減＋生産・年少人口の減少、ステージⅢは老年人口の減少＋年少人口の減少である。

図3 青森県の人口構造

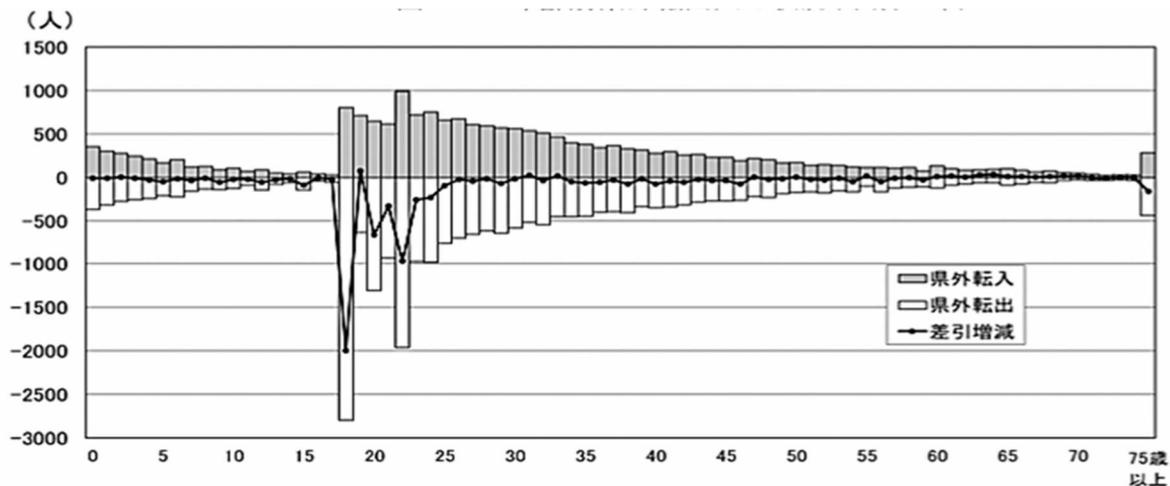


資料：RESAS より作成

② 若者の県外転出入の動向

様々ある人口減少の要因から、私たちは若者の流出について調査を行った。下記のグラフは H28 年の青森県の県外転入・転出を表している。グラフの縦軸が転出入の人口、横軸は転出入が行われた年齢を指す。差引増減の線グラフを見ていくと、18 歳、22 歳の層では大幅な転出超過となっている。これらの結果から考察すると、高等学校または大学を卒業後に県外へ転出する人が多いと考えられる。

図4 青森県の年齢別人口移動

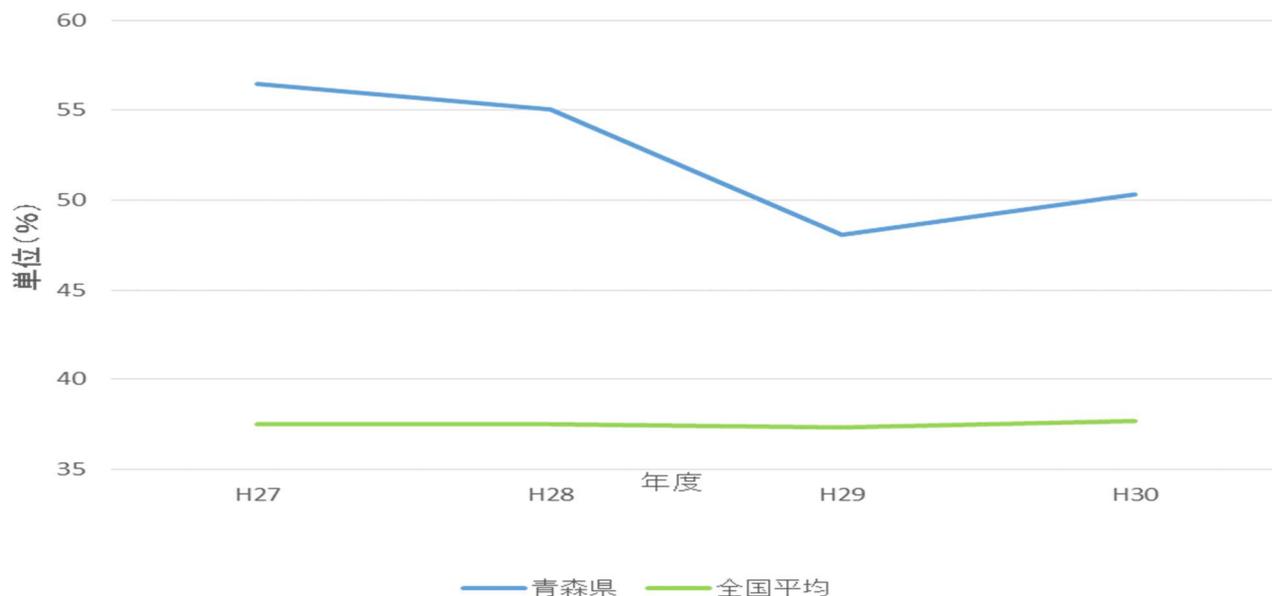


資料：青森県企画政策部「平成28年 青森県の人口」

③ 若者の流出の要因

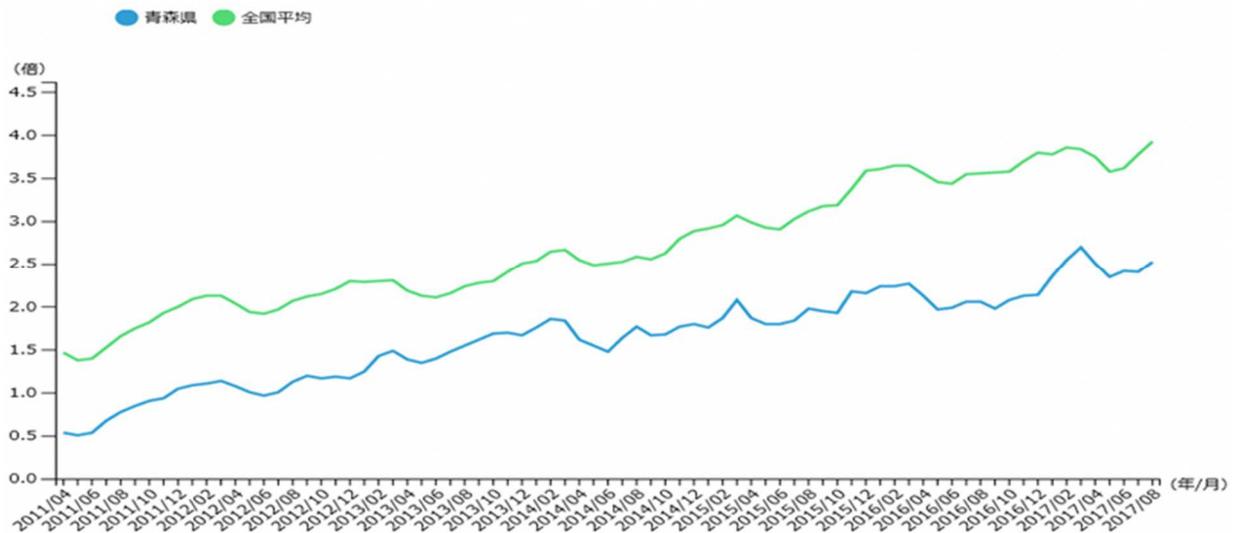
若者の流出の要因としては、非正規雇用、そして有効求人倍率の割合ともに全国の平均よりも悪い状況であるということがわかった。非正規雇用の割合はH27年度から低下傾向にあったが、H30年度に上昇した。またH27～29年度は低下していたが、全国平均に比べると約10～15%下回っている。このことから、青森県の方が非正規雇用の割合が全国よりも高い。有効求人倍率に関しても、2011年4月から2017年8月まで常に全国平均を下回っている。

図5 青森県の非正規雇用の割合



資料：RESAS より作成

図6 青森県の有効求人倍率



資料：RESAS より作成

④ 青森県の人口減少の流れ

以上のことから人口減少に加えて、若者の流出がもともとあった人口減少に加わり、この2つの要素によって人口減少がさらに進行しているという状態である。

(2) 通年観光の提案

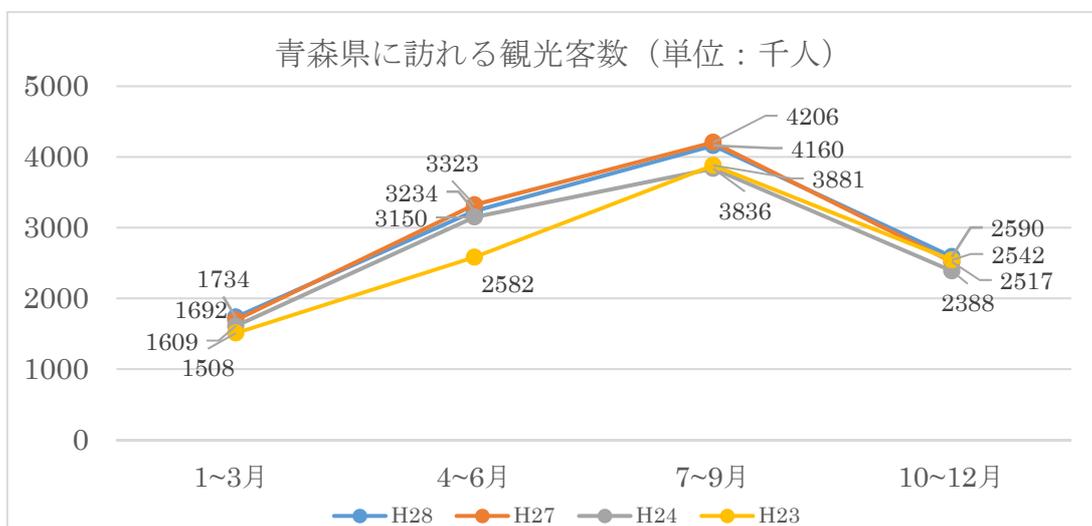
① 通年観光とは

そこでこの人口減少を解決するために私たちは通年観光を提案する。通年観光とは1年を通じて観光を楽しむことができる通年型の観光であり、青森県では冬場の観光客の獲得が課題となっている。

② 月ごとの観光客のグラフ

下記のグラフ(図7)はH23年、H24年、H27年、H28年の1年間の観光客数の推移である。月ごとの観光客のグラフを見ると、1月～3月と10月～12月の観光客は他の時期と比べて、比較的少ないということがわかる。つまり、青森県を訪れる観光客数には季節的なばらつきが見受けられる。

図7 青森県の月ごとの観光客数



資料：RESAS より作成

③ 観光客がバラついてしまうと

このように観光客がバラついてしまうと繁忙期だけ労働需要が高まり、非正規雇用の割合が増加、そしてサービスの質の低下につながり、リピーターの減少という負の連鎖が生じてしまうことが予想される。

そこで私たちは「関係人口」というものに目をつけた。関係人口とはその地域には常には滞在してないが、何らかの関わりを持つ人たちのことを指す。

④ 通年観光促進による一連の流れ

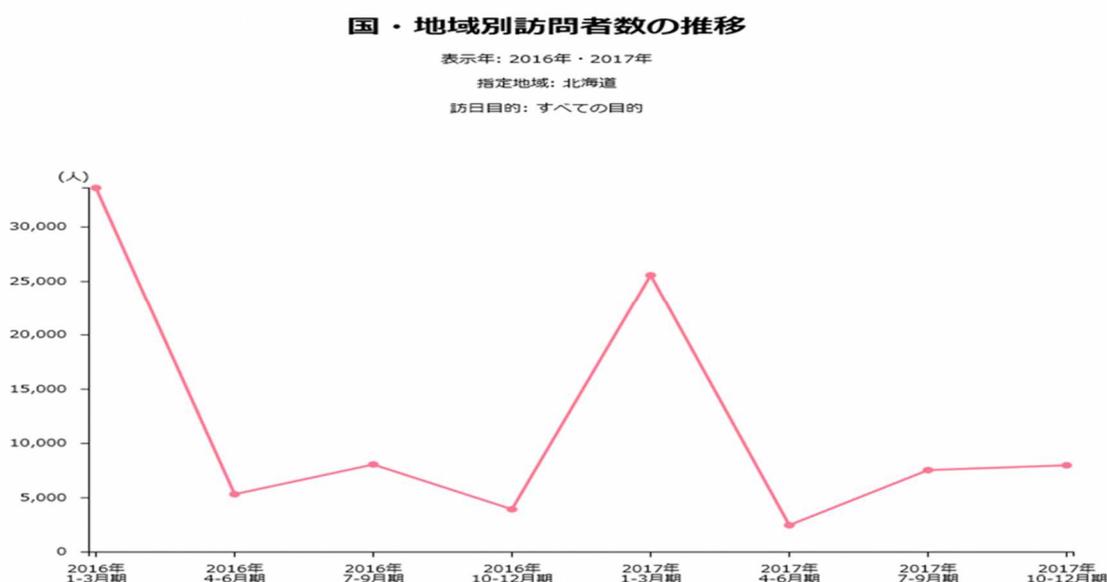
通年観光によって安定した観光客を獲得できると観光・サービス業で労働需要が増加する。労働需要の増加によりこれまで流出していた若者が定住し、流出が抑制される。そして通年で観光客が訪れると正規雇用の割合が増加し、上質で満足度の高いサービスが提供される。それによりリピーターやさらなる観光客の獲得によって関係人口の増加が期待される。

(3) 具体的取り組み

① パウダースノー

近年アジア諸国では所得が増加しウィンタースポーツが人気となっている。下記のグラフは、2016年、2017年に北海道を訪れたオーストラリア観光客の3ヶ月ごとの推移である。このグラフの突出している月は、2016年1月～3月、2017年1月～3月であり、いずれも冬である。この原因を調査していくと北海道はウィンタースポーツなどの雪を使った観光を積極的に行っていることがわかった。青森県も同じ雪が降るという環境があるので、青森県も北海道のケースを参考にして、雪を使った観光の提案しようと考えた。

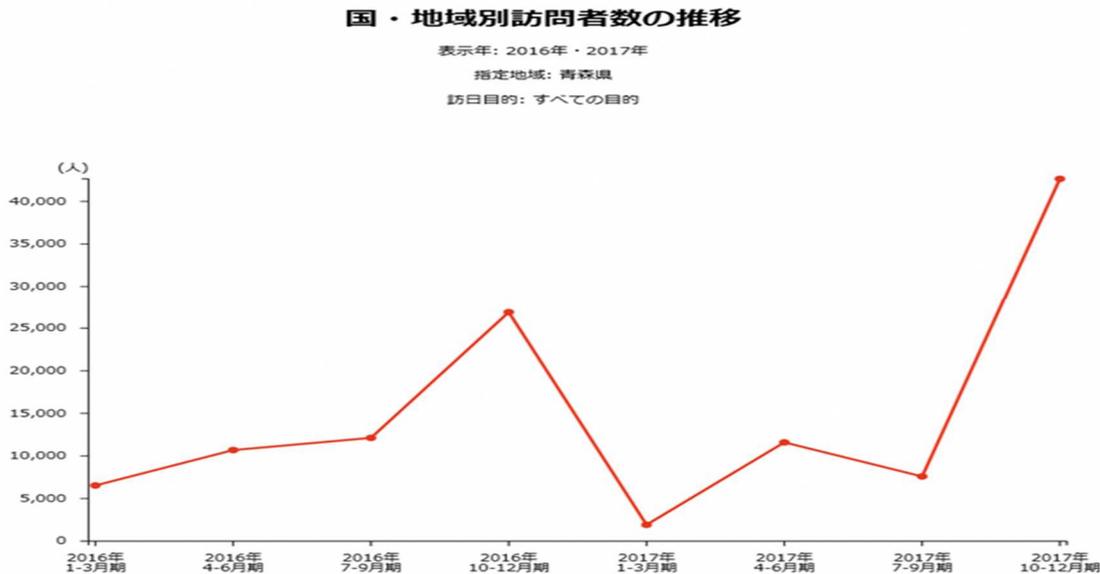
図8 北海道へのオーストラリアからの観光客数の推移



資料：観光庁「訪日外国人消費動向調査」

そこで提案するのが八甲田山の上質なパウダースノーである。下記のグラフは青森県を訪れる台湾人観光客の季節ごとの推移を表している。このように台湾からは青森県を訪れる観光客が多いという現状がわかる。八甲田山のパウダースノーについての PR を台湾だけでなく他のアジア諸国にも行い、青森県の魅力を伝えることで、冬場の観光客の獲得につながるのではないかと考える。

図9 青森県への台湾からの観光客数の推移



資料：観光庁「訪日外国人消費動向調査」

② ふるさとワーキングホリデーへの加入

次にふるさとワーキングホリデーへの加入を提案する。ふるさとワーキングホリデーとは総務省が企画する地方活性化プロジェクトである。都市部に住む若者達が、一定期間地域に滞在し、働きながら地域の人と交流するというプロジェクトである。通常の旅行では味わえない、地方を丸ごと体感することが狙いである。青森県はまだこのふるさとワーキングホリデーへは未加入なので、参加することによって都市部の若者達に青森県の魅力を伝えるきっかけになると考える。

実際に北海道栗山町で酒蔵体験を行った N さんは、「日本文化、地方の街に対する考え方が大きく変わった。地域によって言葉、文化、料理、歴史など様々な違いがあり、その違いはどれもとても魅力的だと感じた。観光で訪れただけでは街の一部を見ることしかできないため、こんなに知らないことがあることに驚きを感じた。日本の伝統的な文化や価値観についてもっと知りたい、発信したい」と答えていた。(総務省 HP 参照) このように観光とは異なるワーキングホリデーという制度は、街全体の魅力を伝えることができるきっかけになると考える。

③ ふるさとワーキングホリデーの具体的取り組み

ふるさとワーキングホリデーとして提案する内容 2 つを紹介する。1 つ目は酒蔵体験である。ふるさとワーキングホリデーでは北海道で酒蔵体験をするというプランがあったので青森県でもこれをできるのではないかと考え、黒石市の小店通りにある酒蔵へヒアリング調査を行った。ヒアリングは酒蔵体験として観光客を受け入れること

は可能かという内容を中心に伺った。2 件の酒蔵に調査を行ったが、どちらの酒蔵も酒蔵体験には前向きではなかった。理由を伺うと伝統を守るために基本的に外部からの人は受け付けておらず、観光客を受け入れる設備が整っていないという回答がどちらの酒蔵からも得られた。以上のことから黒石の酒蔵でのワーキングホリデーは難しいということがわかった。伝統的な製法を守ることは重要であると考えるが、ふるさとワーキングホリデーのような新しい制度を導入することが必要であるため、私たち大学生ができることは何かを考えることが今後の課題だということがわかった。

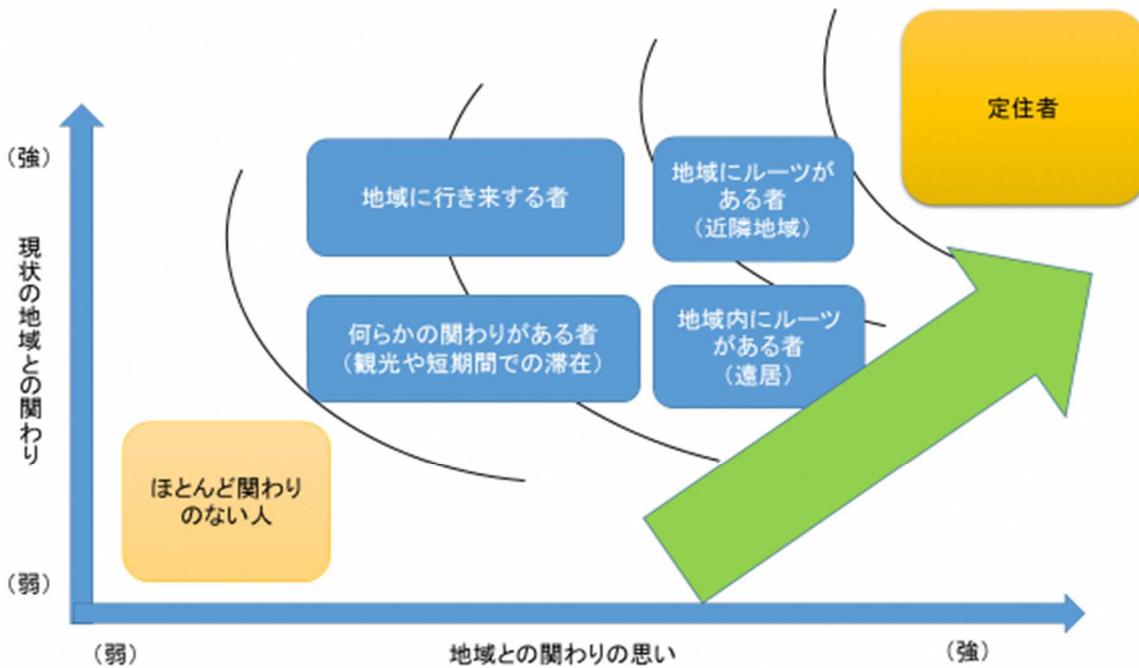
2 つ目にふるさとワーキングホリデーとして提案する内容は、農業体験ホームステイである。これは八戸市の近くの南部町で行われており、私たちも実際に農業体験をした。農業体験では梨や桃の収穫や、民泊先の農家の方々にインタビューを行った。また南部町ならではの新鮮な魚介や、郷土料理のせんべい汁をごちそうになった。民泊先の方にインタビューを行った結果、ホームステイには多くの外国人が訪れていることがわかった。ホームステイに訪れた外国人とは多くの場合、身振り手振りでコミュニケーションを図っているが、伝えづらい内容の際は、スマートフォンの翻訳機能を使っていることがわかった。

また南部町役場でも同様にインタビューを行った。インタビューでわかったこととしては、このホームステイでは外国人もたくさん受け入れられており、約 36 件の農家の方々が受け入れに協力していることがわかった。街全体で農業体験ホームステイの活動に積極的であり、ホームステイを受け入れてくれる農家の方々や、農作業体験に協力してくれる農家の方々には金銭的な援助を行っていた。そのため、外国人の受け入れ先が多く存在しており、これにさらに日本の若者達を受け入れることができれば、若者や、外国人がより一層青森県に訪れることが期待できる。

③ 関係人口という考え

最後に関係人口という考え方についてまとめる。総務省 HP を参考に次頁のグラフを用いる。このグラフは縦軸が現状の地域との関わりを表し、横軸が地域との関わりの思いを表している。つまり一番左下の「ほとんどの関わりのない人」は現状の地域との関わりが薄く、その地域に何の思い入れがない人を指す。そして一番右上の「定住者」は現状の地域との関わりが最も強く、地域に対して思い入れがあるということである。この「ほとんど関わりのない人」と「定住者」の間に位置する、「地域に行き来する者」「地域にルーツがある者（近隣地域）」「何らかの関わりがある者（観光や短期間での滞在）」「地域内にルーツがある者（遠居）」これらの人たちを関係人口と呼ぶ。今回の調査では、「何らかの関わりがある者（観光や短期間での滞在）」の категорияに位置する人を、人口減少改善のためのターゲットとし、関係人口と呼ぶ。今回の調査では 1 つの categoria に絞り、対策を考えたが、今後それ以外の、「地域にルーツがあるもの（近隣地域や遠居る）」や「地域に行き来するもの」の categoria についても関係人口が増加していくことで、青森県を第 2 のふるさとに考えている、青森に魅力を感じたので住みたいという意志を持った人が増加する。こういった関係人口の増加が定住者にまでつながることで、青森県の人口減少は改善傾向に進むと考える。

図 10 関係人口の考え方



資料：総務省 HP より作成

(4) まとめ

最後にこれまでの内容をまとめる。まず青森県は就職先がない若者の流出によって人口減少が深刻化している。この人口減少という問題を解決するためには、若者の就職先を充実させることが重要である。そこで通年観光プログラムを提案する。通年観光プログラムが実現されることにより、観光需要が高まる→観光・サービス業において雇用の促進が期待される→流出していた若者の雇用促進→人口流出が止まる→人口減少問題解決のきっかけとなるといった好循環が期待できる。

また通年観光が実現されると、これまで繁忙期のみの非正規雇用が、正規雇用となるため上質で満足度の高いサービスが提供されることが期待できる。すると観光客の中でリピーターが増え、何度も青森県を訪れる間に移住したいという考えを持つ人が生まれるのではないかと考える。さらに、ワーキングホリデーに参加することにより、都市部の学生が青森県という地域に愛着を持つきっかけになると考える。これらの観光客やワーキングホリデー参加者といった関係人口を増加させることで、定住者の増加につながると考えられる。つまり通年観光プログラムの実現は、これまで流出していた若者を地域にとどめるだけでなく、将来的に定住の可能性を持っている関係人口を増加させることができるため、人口減少の抑制につながると考えた。

3 調査研究に参加して全体の感想

今回の調査研究に参加して印象に残ったことはいくつかある。まずは南部町での農業体験ホームステイである。外国からホームステイに訪れる人も多く、その方々とコミュニケーションをとるために、農業体験ホームステイに協力してくださる方々それぞれが考えて、臨機応変に対応していることが印象的であった。また私たちが農業体験ホームステイに参加させていただいたのは夏だったので、農作業をさせていただいたが、農作物の収穫が困難な冬の期間にも農業ホームステイを行っているため、ホームステイに参加する人が思い出に残るような工夫も行っていった。具体的には地元の祭りに一緒に行くことや、しめ縄づくりなどを体験できるようだった。村役場にお話を伺った際も、私たちの疑問に一つずつ答えてくださった。村役場の方々の支援や、農業体験ホームステイを受け入れてくださる方々と実際にお話し、様々なコミュニケーションを図ることができるといふ、農業体験以外の魅力を十分に感じることもできた。こういった体験をする人が多ければ多いほど、青森県を第二のふるさととして考える人が増えるのではないかと強く思った。

しかし同時に、今以上のより多くの方々に農業体験ホームステイに協力していただけるような環境づくりが必要なのではないかと感じる。村役場の方にお話を伺った際に、「食事にどういったものを出せば良いかわからない」「外国から来てくれた人とどうやってコミュニケーションを取っていけば良いかわからない」といった不安な部分が多いため、施設がそろっているにも関わらず、農業体験ホームステイに消極的な方々もいるという話をしてくださった。そういった問題を少なくしていくための具体的な解決案を考えていくべきだと思った。またこの農業体験ホームステイは、以前は平川市などでも行われていたが、現在は行われていない。農業体験ホームステイという新たな取り組みが、何故行われなくなったのか、どうすればもう一度行えるかといった問題点、解決策を考えることが青森県の観光産業の発展にもつながるのではないかと考える。

もう一つの印象的だったことは、黒石市での酒蔵へのヒアリング調査である。二件の酒蔵に行き、調査に協力していただいた。はじめに黒石市の観光案内所に行った。案内所の方は多くの質問に丁寧に対応してくださった。またその方自身も黒石市への観光客誘致のために、キャンドルナイトという新たなイベントを主催していると聞いた。「黒石駅周辺の宿泊施設がないため、観光客が黒石市に宿泊するという考えにならない」「冬の除雪作業が行き届いていないため、観光客が歩きづらいため冬になると観光客が来ない」といった黒石市への観光についての課題を詳しく教えていただき、調査の参考になった。

また研究成果発表後に冬の観光地として有名なストーブ列車に乗車した。五所川原駅から金木駅までの約20分間、往復で体験した。金木行きの列車はほぼ満席となっていて、予想以上に多くの観光客が訪れていたことに驚いた。列車内に設置してあるストーブでするめを焼き食べることができる。また飲み物も売られており列車内で飲食ができる。駅員の方にお話を聞いたところ「列車内で売られるするめが特に人気で、乗車中に焼き切れるか不安な時がある。」「降りる駅が近い人が持参したするめを優先的に焼くように心がけている」と教えてくださった。列車から降りた後、金木駅から徒歩10分ほどの国指定重要文化財である太宰記念館「斜陽館」を訪れた。この建物は太宰治の実家にあたり、昭和25年から旅館「斜陽館」だったが、その後平成8年3月に旧金木町が

買い取った。また旧金木町では毎年6月19日に「桜桃忌」を開催していたが、この日は太宰治の誕生日であったので、平成11年から「生誕祭」として催されている。建物は2階建てとなっており、蔵と土間があり建物自体は和室が多いが、2階には和室の他に洋室があり和洋折衷の作りとなっていた。建物内には太宰治が執筆した文庫が展示されている部屋や、ショートムービーが上映されている米蔵があった。建物内では、太宰治に関連しているものが多く売られていた。また斜陽館近くの飲食店では、太宰治の好物だったたけのこ等が入っている「太宰ラーメン」が売られていた。

ストーブ列車や斜陽館は観光客が多く、外国からの観光客も多く見受けられた。しかし、斜陽館の近くにはあまり多くの観光場所がないため、ストーブ列車が運用される冬に観光客が集中しているのではないかと考える。生誕祭には多くの人を訪れていると思うが、それ以外の大きなイベントはあまり開催されていないため、ストーブ列車が運用されない冬以外の期間でも、観光客を呼び込むための何らかのイベントが必要なのではないかと考える。

今回の調査では様々な場所に行き、多くの人とコミュニケーションを取ることができた。その活動の中で、青森県には実際に体験しないとわからない魅力が多く存在していることを認識した。また、現地の人にしか気づかない問題点も多くそれらの問題点を解決するために、私たち大学生ができることは何かを考えていくべきだと強く感じた。青森県の魅力や、現状、問題点を実際に体験することで知ることができたので、より現実的な人口減少に関する対策を考えることができた。このような機会を与えてくださった青森県庁の皆様、企画調整課の三浦さま、並びに我々の活動に携わっていただいた皆様に、この場を借りて深くお礼申し上げます。

